

単元「唐風から日本風へ変わる文化」の 取り扱いに関する新視点と指導方法の一例

神奈川県私立鎌倉学園中学校 風間 洋
神田基成

1 はじめに

本稿は、このたび改訂された『社会科 中学生の歴史』（以下、教科書）を活用して、教科書内容の歴史的理解を深めるとともに、生徒みずからが考え、その考えを披露し合う授業づくりをめざした試案である。教科書の単元「唐風から日本風へ変わる文化」は、今回記述の見直しが行われたところでもあり、ここに最近の歴史研究の進展から具体的な素材をもちこんだ指導案①・②を提示したい。

2 文化史の学習の現状と課題

教師：「これまで、〇×時代の政治や社会のしくみを話してきたから、今日の授業は、その文化について勉強しよう。」

生徒：「え～、今日は文化か。あんまり文化の勉強っておもしろくないんだよな、たくさん仏像や本の名前が出てくるだけで、覚えなきゃならないんだもん。」

歴史の授業中、歴史がとても好きで熱心聞いてくれる生徒がつぶやいた一言である。「文化史」の授業に頭をなやませている教員も少なくないであろう。現在の教科書の単元構成では、政治・社会史を一通り学習した最後にその時代の文化の記述があり、限られた授業時間のなかで毎度しわ寄せを受けている「かわいそうな分野」になっていないだろうか。

そもそも生徒が文化史を「つまらない」と感じている最大の原因は、教員が政治・社会史のダイナミックな動きと切りはなす形で授業をしてしまうからではないだろうか。教員側が、その成立背景や特徴を政治・社会史と連動させる形で、考察させる授業が求められている。限られた授業時間であるならば、多くの文学・美術作品を羅列する授業形式を思い切って捨象し、その時代の文化を象徴するような題材（文化財）にしぼって考察させ、解説することも必要であろう。

以上、自己の苦い経験をふまえ、今回の単元「唐風から日本風へ変わる文化」では、「かな文字」と「密教と浄土信仰」に題材をしぼってその時代背景や特徴を考察させる指導案を提示したい。

3 指導案

指導案①（教科書p.44～46）

「東アジアの動きと国風文化」、「かな文字と新しい文学」

《ねらい》

9～11世紀におけるわが国の「かな文字」の発明・成立は、国風文化において必ずふれるべき項目で、多くの女流文学作品が生み出される源泉であったことは周知の事実である。とかく女流作家とその作品群を説明する授業形式におちいりがちであるが、今回はその成立の背景を、東アジアの大きなうねりのなか

で考察させることに重点をおきたい。

一昔前は、国風文化の成立の背景に〈894年の遣唐使の派遣中止→「日本固有」の文化の開花＝国風文化〉、という図式が提示され、教員もこの「わかりやすさ」、「教えやすさ」に安易にとびついてしまってきたように思う。

しかし、近年の古代東アジア史研究の進展はめざましく、国風文化が開花した背景も9～10世紀のアジア情勢のダイナミズムのなかで理解しようとするのが主流となっている。教科書p.45～46には、近年の学問成果を多く反映した記述がなされ、図版も有効である。

《導入》

まず、復習として教科書p.35の「⑤7～8世紀の東アジア」の図をかかげ、唐を中心とした東アジア体制が安定しているようす、日本の遣唐使の派遣目的が唐の政治制度や文化の吸収にあったことを発問しながら、確認させたい。

《展開①》

この情勢が9～10世紀にどのように変化したかを教科書p.43「唐から宋へ」の記述や巻末の年表で確認・発表してもらおう。教員が用意した当該期の年表・歴史地図などを提示してもよいだろう。

894年	日本、遣唐使の派遣を停止
907年	唐の滅亡→五代十国の分裂状態
926年	渤海の滅亡→遼（契丹）の台頭
935年	新羅の滅亡
936年	高麗が半島統一
979年	宋（北宋）の統一

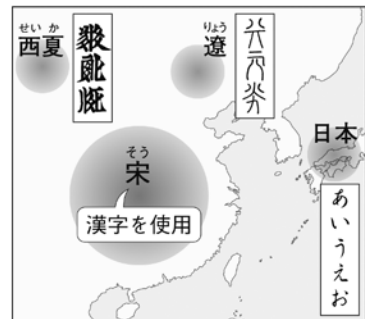
提示する年表（例）

ここで留意したいのは、東アジアの政治・文化の求心力であった唐が滅亡し、中国が混乱状態にあったことである。そのなかで日本の遣唐使が停止（廃止ではない）となった意味を考えさせたい。「これまで政治制度や文化の圧倒的中心であった唐が滅亡したということは、周囲の国にどんな影響が出るのだろうか？」と

いった問いを投げかけてみる。ここでは、中国の混乱状態が、周辺諸国の民族的自我の確立と政治的自立を進めたことに気づかせる。

《展開②》

教科書p.46「⑫東アジア諸国の文字」を示す。先に考察した東アジア情勢の激変と連想させて、意見を交換させる。中



⑫東アジア諸国の文字

『社会科 中学生の歴史』 p.46

国周辺諸国の自立が政治面だけでなく、それぞれの民族文化の形成を促進したことに気づかせたい。契丹（遼）の契丹文字、西夏の西夏文字は、中国の漢字をもとに独自の文字の開発をした新しい動きである。突然日本だけが「かな文字」を発明したのではないこと、東アジア情勢のうねりの一環に「国風文化」が生まれたことを強調しておきたい。

《まとめ・留意点》

最後に『古今和歌集』、『源氏物語』、『枕草子』等、10～11世紀に生まれた作品を簡単に紹介する。そして教科書p.45の記述にあるように、決して遣唐使の停止が中国との交流の断絶ではないことにも留意する。むしろ商人の交易は活発となり、多くの中国の文物が日本にもたらされたことにも触れたい。中国との交流の目的が、公式な使節派遣ではなく、交易に変化したのである。博多などで発掘される発掘遺物や絵巻物にえがかれる「唐物」を図版で提示するのもよいだろう。「唐風の文化を基礎にしながら日本の貴族の生活や好みに合わせ（教科書p.45）」た文化が「国風文化」であることを確認しておきたい。

指導案②（教科書p.46～47）

「仏教の新しい動き」，「末法の世と浄土信仰」 《ねらい》

古代・中世の文化史において宗教，とくに仏教の果たした役割は大きい。しかし，生徒にとって仏教のイメージは，「古臭くて，わかりづらい」，「縁遠い存在」という感覚があるようだ。ここでは，密教と浄土信仰を対比させ，その教え・流行の背景を象徴する図版を対比して提示し，両者のイメージを把握させることに努めたい。

《導入》

まず，比叡山延暦寺・高野山金剛峯寺の「山岳寺院」の写真や教科書p.46の「⑨延暦寺での密教の祈とうのようす」をかかげる。一方，教科書p.47「⑭平等院鳳凰堂」，「⑮阿弥陀如来座像」，「⑯雲中供養菩薩像」を対比して掲示し，生徒に両図の印象・感想など，自由な発言をうながしてみる。「山岳寺院」や教科書p.46⑨の図版からは，

- ・ けわしい山のなかにお寺がある。
- ・ 暗やみで火をたいて何かいのっている。

教科書p.47⑭～⑯の図版からは，

- ・ 前面に池があつて，優雅なお寺。
- ・ 朱色の柱があざやかで中央に金色の阿弥陀如来像がある。
- ・ 阿弥陀如来はおだやかな感じ。菩薩像は雲に乗って天使のようだ。

などの感想が予想されよう。生徒の図版から得る直感＝イメージをだいにさせたい。

《展開①》

まず，最澄・空海という二人の僧侶が平安初期にもたらした仏教が密教であること，その寺院は比叡山や高野山に建てられた山岳寺院であり，山奥での修行を重視したことを解説する。また，その祈とうやまじないが，「この世の病気やわざわいを取り除く（教科書p.46）」ものであることを解説する。

ここでは，なぜこのような教えが天皇や貴族に受け入れられたのかを考察させる。当時の藤原氏ら貴族が他氏排斥等で権力闘争に明け暮れていたことは，撰閥政治の単元(教科書p.42～43)で学習している。こうした政治・社会状況を確認させ，受容の背景を理解させたい。

《展開②》

教科書p.47「⑭平等院鳳凰堂」は藤原頼通による極楽浄土を再現した建築であり，人々を極楽へ迎える「⑮阿弥陀如来座像」や「⑯雲中供養菩薩像」といった彫刻があることを説明する。これらが「死後に極楽浄土へ生まれ変わることを願う浄土信仰（教科書p.47）」を代表する文化財であることをとらえさせたい。ここでもなぜ平安後期に浄土信仰がさかんとなったのか，その背景を考察させる。その材料として「末法思想」の説明をする。ちょうど1052年が末法初年にあたること，絶えまなくくり返される自然災害や疫病，世情不安の増大も当時の人々には，末法到来の現実味をおびさせたのである（教科書p.47の自然環境の項目も参照）。

また，忘れてはならないのは，浄土信仰が念仏をとなえるというやさしい教えのため，これまで天皇や貴族の独占物であった仏教が，地方の豪族や庶民層にも受容されていった点である。強調しておきたい。

《まとめ・留意点》

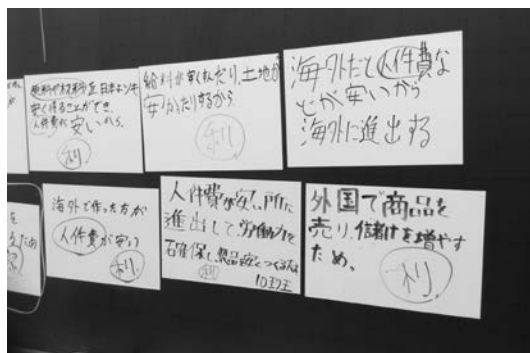
最後に密教と浄土信仰を，①教えの内容，②流行した時代背景，③受容した人々，④代表的僧侶や寺院等を表にしてまとめてみよう。文化史の学習，とくに生徒にとって難しい仏教教義などを説明する際，それを象徴するような図版資料を提示して比較させ（他の時代の文化との比較も有効だろう），イメージをどんどん発言させることからせまっていくことは，有効ではないだろうか。

4 生徒の「気づき」を教材化する

ここで指導上のくふうを紹介したい。図版資料を用いた授業において、教員は生徒たちの「気づき」を最大限に取りあげたいと考えるだろう。また、発問に対する回答から発展させて言語活動にも取り組ませたいが、どのようにしたら効果があるのか思案している方も多いに違いない。一般に、授業では教員が生徒に発問をし、生徒の回答を全体に紹介して取りあげる。しかしながら、教員の発問に対して生徒たちが個々に考えた意見をすべて取りあげるには時間的・物理的な難しさがある。

そこで考えたのが、生徒の「気づき」や意見を教材化することである。全員の意見を書き出すには、時間的制約や黒板のスペースの問題がある。そこで、事前にグループをつくっておき、グループ単位で意見を出してもらおう。まず、グループのメンバーで意見を出し合い、集約してより良い意見にする。次に、各グループの意見をクラス全体に披露する。そのために必要なものは、ホワイトボードマーカーで書くことができるマグネットシートである。生徒に黒板まで意見を書きに来てもらう方法をとったこともあったが、黒板前が混雑し、時間を有効に使えなかった。マグネットシートならば、グループでの話し合いのときに記入し、あとは黒板に貼るだけとなる。さらに、教員がこのあと各意見を類型化して仕分けをする際にも、シートごと動かすことができる。

そうして出された「気づき」や意見を現代的な問題とも関連させ、単元の学習内容に重ねていくと、生徒は自分の意見が学習内容のなかに位置づけられているという実感をもつようになる。



別単元でのマグネットシート使用例

5 おわりに

ICT機器の普及により、社会科で扱う内容は細かいレベルまで検索可能で、授業での情報の提供、つまり暗記内容を板書し、それを生徒に書き写させるだけの行為は意味を失いつつある。巷でもアクティブ・ラーニングが声高にさげられるようになり、社会科としても何ができるのか、どうあるべきなのか、ということを考えているところである。

そこでは学校のあり方も問い直されることになるだろう。40人が一つの教室につどっているならば、そこに40通りの「気づき」や思考が存在するはずである。教員は、それを可視化していく。

これまでの実践では、生徒たちの「気づき」をすくい上げ、それを教室空間で共有することに限界があった。それが、ICT機器の活用や教具の小さなくふうでもっと多くの成果を得ることができると考えている。

歴史的分野の授業づくりにおいては、歴史学研究的動向をふまえた教材研究はもちろんのこと、生徒自身の思考とその成果を可視化することが求められているのではないだろうか。それにより、生徒と教員との距離を縮めることにもなるであろう。